

オランダ人の通行

西羽 晃

江戸時代に琉球と朝鮮からの使者のほかにもオランダ人が江戸まで行きました。鎖国している日本が西洋との通商を唯一開いているのがオランダであり、オランダ商館が長崎の出島にありました。この商館長（カピタン）は江戸の将軍に挨拶に行きました。初めのころは毎年でしたが、寛政2（1790）年からは4年に1回となりましたが、すべて東海道を通っています。通算で166回も江戸へ行っており、その度に桑名を通っています。鎖国している日本ですが、桑名の人にとって西洋人や西洋の文物と接する機会が珍しくなかったのです。オランダ人が桑名で休泊した記録は、桑名に残っていないのは残念ですが、ただ一つの記録が『久波奈名所図会』の「桑名盆」の項にオランダ人が描かれています。即ち桑名は西洋にも開かれていたのです。



その説明に「桑名盆ハ宮通塗師にて製す。当所の名産なり。高貴の会席盆并菓子盆に用て上品なり。三ヶの津ハ元より阿蘭（オランダ）人通行の節いつも調へ行て外国交易の一

助とす」とあります。今でもオランダのどこかに桑名盆が残っているかも知れません。

オランダ人は江戸へ行った際に紀行文を残しています。その中には桑名の事も書いてあります。日付は西洋歴です。

1776（安永5）年4月16日、ツンベルグは「我々は桑名の美しい広い宿に泊った。この町は尾張（伊勢の間違い）の大きな美しい町で、堅固に城で固めてある。（中略）この町は濠と城壁に囲まれ、高き櫓が散在してあるが、これが甚だ美しい眺を呈してある。町の城壁に細長い穴があけてあって、城の兵士はこゝから敵の矢に身を曝すことなく、矢を射かけることが出来る」（『異国叢書』山田珠樹訳）。

1822（文政5）年3月14日、フィッセルは「カピタンは富田にて風景佳なる一旗亭に於て、我等に蛤料理を饗せり、是より町屋川に達して450旧エル（旧エルは約1メートル）の長さある木橋を渡り、晩遅く桑名へ到着せり、桑名は城を有する都会にして、地利甚だ商業に便なり。又桑名と宮とは鉄器の工業を以て名あり。15日平野の間を遡河し12時に佐屋に上陸し」（『異国叢書』斎藤阿具訳）。

1826（文政9）年3月28日、シーボルトは「1時ころ桑名の町はずれに着き、鐘造りやその他の鋳物工場を見物した。（中略）桑名は城のあるかなり大きな町で、そこで昼食をとった。（中略）城の傍を通り過ぎたが、その城は、舟の行き来の多い川と美しい中州や茂みで生気のみなざる近郊と一つとなって、心地よく変化に富んだ眺めを呈していた」（東洋文庫『江戸参府紀行』斎藤信訳）。

いずれも桑名は城と商業や工業で発展している美しい町であると感嘆しており、シーボルトは鍋屋町の広瀬鋳物工場も見学しています。